

第二十八回 兄弟あにに逼りて曹植詩を賦す 兄の讎あだうちに急りて張飛害がいに遇う

— 七歩ななほの詩 —

(前回から今回まで)

関羽の死後、曹操は悪夢あくむと頭痛に悩まされつづけます。そして、頭痛を治療するため、名医の華佗かだが呼び寄せられます。

華佗は開頭手術をすれば病気をなおすことができると言いますが、曹操は、華佗が関羽と親しかったことから、手術にかこつけて自分を殺すのではないかと邪推じやしういし、華佗を投獄して殺してしまいます。

しかし、曹操の病状はますます悪化します。そこに、かつて殺した伏皇后らの亡霊むくが襲いかかり、ついに曹操は自分の寿命じゆみようは尽きたと覚悟し、曹洪そうこう・司馬懿しばいらに後事こうじを託して亡くなります。享年六十六。時に建安二十五年(二二〇)春正月のことでした。

○曹操について — 『三国志演義』に見る光と影

曹操をどう評価するかは、古来、興趣きようしゆのつきないテーマになっています。

有名な「治世の能臣、乱世の姦雄」（『三国志』武帝紀注）という言葉は、人物評定で高い許劭の曹操への評価ですが、『後漢書』許劭伝では「清平の姦賊、乱世の英雄」となっています。曹操に抜群の能力を認めながら、「英雄」と「姦雄」の二面性を持つと評価しています。それだけ現実の曹操は、一つの次元ではとらえられない複雑性を有しているのです。

将帥としての曹操は、ライバルである蜀の劉備や呉の孫権が、遙かに及ばない才能を持っていました。乱世を勝ち抜く力量という点で、曹操は傑出していました。

また、人心を掴む能力にだけ、思い切った抜擢や、投降した敵将を巧みに取り立てるなど、多くの名将が幕下に加わっています。

その才能は「武」だけでなく「文」の面でも傑出していました。陣中にあっても書物を手離さず、みずから「孫子」の注を書いたほどでした。また、中国史上「最初の詩人」（それまでの詩は作者不明の歌謡）といわれ、彼の詩は二十余編が現存しています。

『三国志演義』は、曹操に自らの詩「短歌行」を、興趣のおもむくままに謳いあげるといふ榮譽を与えています。劉備は、劉表からあいつが詩作したのを見たことがないといわれるなど、「文」という点ではまるで比べものになりません。

こうしてみると、曹操は文武両道の稀代の英傑ということになるのですが、一方、彼が歩

んだ足跡をたどると、もう一つの人物像が浮かび上がってきます。

それは、冷酷非情れいこくひじょうという面です。曹操には、自分に尽くしてきた部下であつても、容赦ようしやなく殺してしまう非情な一面がありました。

曹操の冷酷非情さを物語るものに、父親の友人・呂伯奢一家の虐殺ぎやくくさつがあります。曹操は時に、自分の野望と目的のためには平気で人を殺すという、ニヒリストの顔をのぞかせます。

この怖さがあるので、どこか人は曹操に心を許しません。

陳壽は「策略さくりやくの限りを尽くして天下を鞭撻べんたつした」と評していますが、曹操は、伶俐れいりな「才の人」であつて、劉備のような「情」の人ではありません。

彼はこの伶俐な「才」を使いこなして、戦乱の世の頂上まで上りつめます。清代の学者趙翼ちやうよくが、「曹操は権術けんじゆつを以て、相い馭ぎよす（『二十二史劄記』）」と指摘した二面です。

しかし、若き日の曹操は、理想に燃えた青年でした。当時の腐敗した政治を厳しく諫言かんげんするなど、正義派官僚として活躍しています。後漢末の動乱に挙兵した当初も、「漢の故征西將軍曹侯の墓」と、墓石に刻まれることだけが望みだったと語っていて、国のために賊を討つという大義を持っています。

しかしその後、彼は帝位纂奪さんだつの野心を持ち、「魏公」から「魏王」へと帝位まであと一步

まで登りつめます。しかし曹操は、帝位につくことを臣下から進言されたとき、天命が私を皇帝に即つけようとしても、私は周の文王に倣ならって皇帝を補佐することに専心する、と拒否します。つまり、曹操の心は、「野心」と「道義」の間を振り子のように揺れ動いているのです。

吉川英治氏は、曹操が晩年にさしかかると、この「野心」が前に出て、彼の醜みにくさが露呈したと解釈されています。吉川『三国志』は、曹操がかつての颯爽さつそうとした面影おもかげを失っていく様子を、次のように描写しています。

「・・・ところが、近來の彼はどうかだろう。赤壁えきの役の前、觀月かんげつの船上でも、うたた自己の老齡をかぞえていたが。老來まったく青春時代の逆境うんげいに嘯うないた姿はなく、ともすれば、耳に甘い側近のことばにうごく傾向がある。彼もいつか、むかし侮蔑ぶべつし、唾棄だきし、またその愚を笑つた上官の地位になつていた」

権力の頂点に昇りつめた曹操の姿を、哀切あいせつの思いを込めて描き出します。

結局、曹操は、若き日に抱いた理想から離れ、かつて自分が唾棄だきしたのはずの人間になつていました。「赤壁の戦い」後、曹操は自らの老い先の短さを自覚したのか、魏公、次いで魏王となつて霸權はけんへの道を急ぎます。その際、魏公就任に反対した荀彧じゆんいくが自殺に追い込まれ、

荀攸は魏王就任に反対して曹操の怒りを買い、憂憤の末に死去します。二人とも曹操を支えた大功臣にもかかわらず、曹操の野望の前に排除されてしまったのです。しかし、曹操は帝位にはつきませんでした。漢王朝四百年の重みが、帝位につくことを躊躇させたのでしょうか。

曹操は晩年、「もしも国家に私という者がいなかったら、いったい幾人が皇帝と称し、王と称したことか」（『三国志』武帝紀の注「魏武故事」、今鷹真・井波律子訳、ちくま学芸文庫）、と自分の人生を振り返っています。つまり、自分が後漢末乱世の混沌と荒廢を收拾したという自負心をもっていました。ともあれこれが、史実における曹操の最大の功績でした。

そして、曹操は亡くなり、曹丕が後を継いで魏王となります。そして、『三国志演義』は残された兄弟の相克を描き、曹丕の陰險な人柄を浮き彫りにします。

曹操は多くの子供をもうけていますが、正夫人の卞夫人は曹丕・曹彰・曹植・曹熊の四人の子を産んでいます。

曹彰は、曹操の臨終に際して駐屯地の長安から呼び寄せられますが、その死に間に合いませんでした。このとき、曹操の葬儀を取り仕切っていた賈逵に、魏王の璽綬がどこにあるか

尋ねますが「貴方の尋ねるべきことではない」と反論され、自分の軍勢を兄の曹丕に引き渡すと、自分の領国へ帰って行きます。

しかし、彼はその優れた武勇を曹丕から警戒されていて、二三年洛陽に来たところ、そこで急死します。『三国志』任城威王彰伝の注「魏氏春秋」では、かつて璽綬のありかを尋ねたことが反逆の証とされ、謁見を許されなかつたので忿怒のあまり急死したとしています。不自然な死でしたので、当時の逸話を集めた『世説新語』尤悔篇では、曹丕が曹彰を毒殺したことにしています。曹丕ならばやりかねないという見方があつたのでしよう。

曹丕は魏王の位につくと、曹操を鄴郡の高陵に埋葬して、呉から送り帰されてきた于禁に墓の管理を命じます。

(本文抄)

于禁が命令を受けてその地に到着してみると、陵屋の白い壁一面に、関羽が魏の七軍を水没させ、于禁を生け捕りにしたときの模様が描かれていた。

上座には関羽がおごそかに座り、その前で龐徳が憤怒の形相をして立ちあがり、一方、于禁は地にひれ伏して命乞いをしている図柄である。

これは、于禁が敗北して生け捕りになり、死を賭して忠節を守ることができず、敵に降伏してまたおめおめと帰ってきたことを憎んだ曹丕が、前もって人に命じて、この絵を描かせたものであった。

そして、わざと于禁にこれを見るように仕向け、辱めようとしたのであった。このとき、于禁はこの絵を見ると、恥と怒りから懊惱して病気になる、まもなく死去した。

(解説)

関羽に降伏した于禁が呉から帰ってくると、曹丕は、于禁が関羽に命乞いをしている絵を描かせ、わざと于禁に見せて辱めます。陰険な曹丕の性格を描きます。

さらに曹丕は、父の葬儀に來なかつた四男の曹熊を自殺に追い込み、同じく葬儀に來なかつた三男の曹植も逮捕して都に連れて來させます。

心配した母の卞氏は曹植を許すよう曹丕にいますが、側近の華歆は、ここで曹植を殺さなければ後々の禍になるといい、曹植の詩才を試したうえで、うまく詩を作れなければ、それを口実に殺せばいいと進言します。

曹丕は曹植を呼びつけると、壁にかかった牛の画を題にして、七歩の間に詩を作るよう命

じ、うまくできれば死罪をゆるすと言ひ渡します。曹植は七歩の間に詩を完成させ、居並ぶ人々を感心させます。すると今度は、「兄弟」という題で即座に詩を作れといます。

(本文抄)

と、曹丕がまた言うには、

「七歩のうちに文章ができあがるのではまだ遅い。即座に、詩を作ることができるか」

「どうか詩題を出してください」と曹植。

「われわれは兄弟だから、これを題にしよう。だが『兄弟』の字句を使つてはならない」と曹丕。

曹植は考えもせず、すぐさま、次の一首の詩を朗々と吟じた。

豆を煮るに豆萁を燃やし

豆は釜の中に在って泣く

本は是れ同根より生ずるに

相い煎ること 何ぞ太だ急なる

豆を煮るのに豆がら燃やせば、豆は釜の中で泣く。もともと同じ根っこから生じたのに、
どうして躍起やっきになつて責めさいなむのだろう。

曹丕はこれを聞くと、はらはらと涙を流した。母の卞氏が出て来て、

「兄がどうしてこれほどきつく弟に当たるのですか」

曹丕は慌てて座席から立ち上がつて言った。

「国家の法律は曲げることはできません」

かくして曹植を安郷侯あんきょうこうに降格させた。曹植は別れの挨拶をすませると、馬に乗つて出発した。

(解説)

ここでは、有名な「七歩の詩」のエピソードを描きます。即座に詩を作らなければ処刑すると脅された曹植が、見事に「七歩の詩」を作つてみせ、理不尽りふじんな曹丕のやり方に抗議する名場面です。

こうして曹丕は、曹植の命は助けませんが、その後も曹植に対する警戒をとかず、都から遠く離れた領地を転々とさせ、曹植を悲嘆ひたんのどん底におとしられます。目の前で繰り広げられる実の息子たちの悲劇に、卞氏の胸中はいかばかりであつたでしょう。『三国志演義』は曹丕の非情さを、これでもかと描きます。

このあと、曹丕は側近らを使い、帝位を曹丕に譲らせるよう献帝けんていに迫ります。献帝は魏の兵士に囲まれて震えあがり、涙ながらに曹丕への禅讓ぜんじょうに同意します。曹丕は、形式的に三度辞退したあと帝位につき、国号を魏ぎとします。曹操の死から六か月後のことでした。曹丕は「舜しゆんや禹うのこと（禅讓）は私も知っているぞ」と、禅讓の欺瞞性ぎまんせいを高言こうげんします。

曹丕が皇帝になつたとの知らせが劉備のもとに届き、献帝もすでに殺害されたいとの噂が聞こえてきます。諸葛亮は、劉備が漢の正統をつぐべきだと考え、幕僚一同とともに皇帝に即位するように上奏しますが、劉備は固辞こじして聞き入れません。そこで諸葛亮は、病気に伏せてしまいます。

諸葛亮は見舞いに来た劉備に、「心配で胸がやけ、長く生きれそうにありません」といいます。劉備が心配事とは何かと問うと、諸葛亮は、劉備が漢かんを継承しないので、人々が離れてゆくことが心配なのだ、と答えます。

劉備は、自分はいやだと言っているのではなく、人々がどう言うかが恐いのだ、といひます。そこで諸葛亮は、漢の血統を継ぐ劉備の正しさに議論の余地はありません。受けなければかえつて咎めとがをうけます、といひます。

劉備が、それではあなたの病気がよくなつてからにしようと言うや、諸葛亮はがばつと起き上がり、劉備が承諾しょうたくしたので、すぐに即位の式をおこなうと宣言します。こうして、劉備は建安二十五年四月十二日、蜀漢の皇帝に即位します。

皇帝となつた劉備は、さっそく関羽の仇討ちあだうのために呉を討とうとします。しかし、趙雲が、討つべき敵は魏であつて呉ではないと諫めいさます。『三国志演義』では、趙雲のあと諸葛亮も諫めたことにしていますが、『三国志』には、諸葛亮が劉備に思いとどまらせようとした記述はありません。

そこへ、張飛が自ら劉備のもとにやつて来て、関羽の仇討ちを訴えます。

(本文)

張飛は地にひれ伏し、劉備の足を抱えて慟哭どうくし、劉備もまた慟哭した。と、張飛は言つた。

「陛下は天子となられ、早くも桃園の誓いをお忘れになったのか。兄の仇をどうして討たれないのか」

「多くの者が諫め止めるので、すぐには動けないのだ」と劉備。

「昔の誓いを他人が知っているはずがありません。陛下が行かれないのなら、私がこの身を捨てて兄のために仇討ちに行きます。仇を討てなかったときは、生きて陛下にお目にかかることはありません」と張飛。

「わたしもそなたといっしょに行くぞ。そなたは手勢を率いて閬州から出発せよ。わたしは精銳を率いて出発し、江州で合流しよう。いっしょに呉を征伐し、この恨みを晴らそうではないか」と劉備。

張飛が立ち去るにあたり、劉備は「わたしは、そなたが酒を飲んだあと暴れ、若い兵士を鞭で叩きながら、そのまま側近くに置いておくことを知っている。これは禍に遭うやり方だ。今後は寛容な態度をとるよう努力せよ。そんなやり方をしてはならんぞ」と言い聞かせた。

さて、張飛は閬中にもどると、軍中に命令を下し、三日以内に白い旗と白い鎧かぶと（服喪中であることを示す）を用意し、全軍、白装束で呉の征伐に向かおうとした。

翌日、部下の将校の范疆と張達が陣幕のなかに入って来て報告することには、

「白い旗と白い鎧よろいかぶどはいっぺんには調達ちやうたつできません。期限を延ばしていただきたい
と思います」

張飛は激怒して、「わしは急いで仇を討ちたいのだ。おまえたちは、わしの命令が聞けないというのか」と言い、衛兵に命じて二人を木に縛りつけ、背中をそれぞれ五十回鞭むちうたせておいて、二人を指さしながら言った。

「明日中に、一つ残らず用意しろ。もし遅れたら、見せしめのために首をはねるからな」
二人は鞭うたれて口から血を吐きながら、陣営に帰って相談したところ、范疆は言った。

「今日ひどい目にあわされたが、とても調達することはできない。あいつは性格が火の
ようなやつだから、もし明日、用意できなかつたら、二人とも殺されるぞ」

「やつに殺されるくらいなら、やつを殺したほうがましだ」と張達。
「しかし、どうして近づくのだ」と范疆。

「われら二人に運があるのなら、やつは寝台で酔いつぶれているだろうし、運がなければ、
やつは起きているだろう」と張達は言い、二人の相談はまとまった。

さて、張飛は陣幕のなかで、気持ちが悪乱し、心も上の空になって来たので、部将たちに
たずねた。

「わしはいらいらして、居ても立ってもいられない。これはいったいどういいうわけだろうか」

「それは、殿が関公をそれほどまでに思っておられるからです」と部将たち。

張飛は酒を持って来させ、部将たちといっしょに飲んだが、知らず知らずのうちに酔っ払い、陣幕のなかで寝てしまった。

范疆と張達の二人は、このことを探り出すと、初更しよこう（午後七時から午後九時の間）ごろ、それぞれ短刀をしのばせて、陣幕のなかに忍び込み、まっすぐ枕まくらもとまで行った。

もともと張飛は目を開けたまま寝る癖くせがあったが、この夜も陣幕のなかで眠っているのを見ると、ヒゲを逆立て目を見開いていたので、二人は手を下すことができなかつた。しかし、二人は、張飛が雷のようなびきをかいているのを聞いてはじめて、側に近づき短刀でその腹を刺したところ、張飛はひと声叫んで息絶えた。ときに五十五歳。

（解説）

『三国志演義』に見る張飛の光と影

『三国志演義』では、張飛の長所と短所が、両極端にはげしく振れ動く姿が描かれます。

張飛といえ、特筆すべきはその「勇」です。「長坂の戦い」ではしんがりを引き受け、裂けくの氣迫で曹操の大軍を追っ払って、劉備の危機を救っています。

「豹ひょうのような頭にドングリ眼、燕つばめのような顎あごに虎ヒゲ、雷かみなりのような大音声、暴れ馬のような勢いがある」豪快そのものの一代の豪勇でした。そして「桃園の誓い」を生涯つらぬく純粹な心を持っています。

しかし、こうした比類なき長所とともに、張飛は、極端な短所も合わせ持っていました。それは、敵から恐れられた破壊力が、自分の味方である將兵にまで見境なく向けられたことです。

張飛は自分の部下の將校に、寢首ねくびをかかれて命を失ってしまいます。それは、乱暴な仕打ちを繰り返したことに對する恨みが原因でした。このように張飛は、自らの暴力性をコントロールできなかつたのです。

陳寿の冷静な觀察眼は、関羽と張飛はともに「国士の風格」あるとする一方で、その欠点を、関羽は剛情で自信過剰、張飛は乱暴で情を持たないことだとしています。

また、『三国志演義』での彼の失敗には、ことごとく酒がからんでいます。寢首をかかれたときも酒に酔っていましたし、徐州じゅうしゅうでは、劉備に禁酒の約束をしながら泥酔でいすいしてしまい、

呂布に大切な城を奪われました。こうしてみると、張飛は、自分自身に対する甘さから失敗を繰り返しているのです。

戦いの舞台では並びなき力量を示しながら、いとも簡単に自分の身を滅ぼしてしまう「破滅型英雄」といえるでしょう。張飛をみると、劉備の忠告に謙虚に耳を傾け、人格の力を身につける努力をすればよかったのにと思います。

かくして、劉備は七十五万の大軍を率いて出発します。そこへ、張飛の長子張苞ちやうほうと関羽の次子関興かんこうが駆けつけます。

一方、孫権は諸葛瑾しよかつきんを派遣して和睦わぼくを求めますが、劉備は激怒して諸葛瑾を追い返してしまいます。